

修士論文（要旨）

2013年7月

聴覚障害教育の課題

—当事者、保護者、一般聴覚障害者の三視点から—

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

210J3013

中山慎一郎

## 目 次

序章 .....	1
第1章 背景 .....	2
1.1 聴覚障害および教育に関する用語 .....	2
1.2 手話の定義 .....	3
1.3 先行研究について .....	5
第2章 予備調査 .....	7
2.1 調査概要 .....	7
2.2 調査結果 .....	7
2.3 稿者のプロフィール .....	11
2.4 インタビューのまとめ .....	11
2.5 アンケート項目の作成 .....	12
第3章 東京近郊在住聴覚障害者のコミュニケーション/言語生活/言語環境実態調査 .....	13
3.1 調査概要 .....	13
3.2 調査結果 .....	13
3.3 アンケート調査のまとめ .....	39
第4章 個人インタビュー .....	40
4.1 調査概要 .....	40
4.2 調査結果 .....	40
4.3 個人インタビュー調査のまとめ .....	50
第5章 聴覚障害教育の問題点 .....	51
第6章 結論 .....	53

参考文献

## 要 旨

稿者は、先天性のろう者で、第一言語（母語）を日本手話、第二言語を書記日本語とするバイリンガルである。稿者の友人の大半は、ろう者（聴覚障害者）であり、仕事や私事など日頃、メールやファックスなどでやりとりをしている。その彼らが書く書記日本語は、ごく一部の者を除き、個人差はあるものの誤用にみちたものである。しかし、大半のろう者の第一言語である日本手話による会話（コミュニケーション）能力は問題のないレベルにある。第一言語に問題がないにもかかわらず、誤用にみちた第二言語を書くのは、学習による個人の差であり、個人の責任となるのだろうか。そこには、聴覚障害教育のあり方によって引き起こされた可能性はないのだろうか。聾学校出身であるにもかかわらず、日本手話と書記日本語のバイリンガルである稿者という例がある以上、日本手話を第一言語として、生活レベル以上で使用しつつ、第二言語としての書記日本語を習得することは可能ではないか。

本研究では、最初に、聴覚障害および教育に関する重要な用語の定義、先行研究の概観をおこなう。そして、聴覚障害者本人、保護者、さらに、不特定多数（東京近郊在住）の聴覚障害者からの三つの視点から、研究テーマを追究する。これまでの殆どの論文に共通した聴覚障害教育を担う聴者側からの視点ではなく、教育を受けた側の当事者の視点を重視したい。

まず、手話および聞こえの障害と使用言語との関係の定義の混乱が、聴覚障害教育界のみならず、手話使用の当事者であるろう者にも見られるので、定義を整理した。

次に、予備調査として稿者の母に対し、年少時の言語環境および家族との関係などがどうであったかをインタビュー調査し、分析した。この予備調査からは、聴覚障害児の乳幼児期における言語獲得および健全なアイデンティティ形成に必要な環境とはなにかに対する示唆を得た。

この予備調査の結果をもとに、不特定多数の聴覚障害者に対するアンケート項目を作成した。以下の領域にそれぞれ属する 22 の項目について 226 の回答を得た。

- 1) 一番理解できる言語が定まった年齢
- 2) 小・中・高校生の時の学校および主な使用言語
- 3) 親や手話のわからない聴者、および、手話のわかる聴者と話す時の主な使用言語
- 4) 日本手話と手指日本語の違いの認識、および、異なり箇所の認識
- 5) 聴覚障害者が感じた、一般社会の手話に対する理解
- 6) 改正障害者基本法で「手話は言語」とされた意味の理解

アンケート・データの分析によると、一番理解できる言語は小 5 時の在籍学校によって決まり、また、家庭内および学校における主な使用言語が必ずしも第一言語とはならないという実態が浮かび上がった。そのほか多角的な視点から、日本の聴覚障害教育政策が聴覚障害者らに及ぼした影響を明らかにすることができた。

最後に、アンケート調査では聞き出せなかったこと、および聾学校、聾教育をどのように受け止めているかを個人インタビューで調査した。その結果、読み書き能力が不完全なのは、個人の責任ではなく、聾学校在学中に受けてきた聾教育の影響によるものであると当事者に受け取られていることが検証された。

## 参考文献

- 我妻敏博(1986)「聴覚障害児の文理解方略に関する一考察」『ろう教育科学』28(1),pp30-38
- 我妻敏博(1990)「聴覚障害児の文理解方略に関する一考察(その2)」『ろう教育科学』32(1),pp33-46
- 上農正剛(2003)『たったひとりのクレオール』ポット出版
- 岡典栄・赤堀仁美(2011)『日本手話のしくみ』バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター
- 小野原信善・大原始子(2004)『ことばとアイデンティティ』三元社
- 金澤貴之(2001)『聾教育の脱構築』明石書店
- 木村晴美(2011)『日本手話と日本語対应手話』生活書院
- クリスタル・デイヴィット著／風間喜代三他訳(1992)「ピジンとクレオール」『言語学百科事典』大修館書店
- 佐々木倫子・古石篤子(2004)『ろう児への言語教育のあり方を求めて』慶応義塾大学湘南藤沢学会
- 佐々木倫子・古石篤子(2008)『混乱・模索するろう教育の現場』慶応義塾大学湘南藤沢学会
- 澤隆史・吉野公喜・今井秀雄(1995)「聴覚障害児の読解力について」『ろう教育科学』36(4),ろう教育科学会編集,pp157-170
- 澁谷智子(2009)『コーダの世界』医学書院
- 住田正樹・高島秀樹編著(2011)「児童虐待」『子どもの発達社会学』北樹出版, pp155-165
- 全国手話研修センター編(2011)『よくわかる！手話の筆記試験対策テキスト』中央法規出版
- 全日本ろうあ連盟(1998)『全日本ろうあ連盟五十年のあゆみ』全日本ろうあ連盟 50 年史編集委員会
- 都築繁幸(1997)『聴覚障害教育コミュニケーション論争史』御茶ノ水書房,pp76
- ターキントン・キャロル, サスマン・アレン・E(2002)『聾・聴覚障害百科事典』明石書店
- 中野博子(2006)『発達心理学 第2版』人間総合科学大学
- 「母と子の教室」親の会編(1995)『難聴児の幸せのために』ぶどう社
- 西村純一・井上澄江(2006)「ピアジェの認知的発達段階論」『教育心理学エッセンシャルズ』ナカニシヤ出版,pp20-21
- 野沢克哉・筒井優子(1997)「職業相談に來所するろう学校卒業生にみられる問題 その1—言語力に関する問題—」『聴覚障害』1997(3),pp31-38
- 馬場顕(1999)『用語解説 9歳の壁』聴覚障害 1999-4, 聾教育研究会編集
- ピターソン・クリストファー, マイヤー・スティーヴン・F, セリグマン・マーティン・E・P/津田彰監訳(2000)『学習性無力感』二瓶社
- 村瀬嘉代子(1999)『聴覚障害者の心理臨床』日本評論社
- 文部科学省(2003)『盲学校, 聾学校及び養護学校 幼稚部教育要領, 小学部・中学部学習指導要領』国立印刷局
- 文部科学省(2004)『盲学校, 聾学校及び養護学校 学習指導要領(平成 11 年 3 月)解説—総則等編—』
- 四日市章(2009)『リテラシーと聴覚障害』コレール社
- 鷺尾純一(2002)「インテグレーション環境で学ぶ聴覚障害児・者への教育的支援」『特殊教育学研究』39(4), 日本特殊教育学会
- 渡辺弥生(2011)『子どもの「10歳の壁」とは何か?』光文社新書